タイの古典絵画—タイ画における描き方のパターンについて—

宮原 和香 Waka MIYAHARA

洞谷 亜里佐 Arisa DOYA

辻合 秀一 Hidekazu TSUJIAI

丹羽 洋介 Yosuke NIWA

概要：壁画をはじめとするタイの絵画は、タイ独自の材料と表現により発展してきた。タイ画のスタイルや表現技法は、地域や作家により多少異なっていたが、共通したパターンがあることが判明した。このことから、仏教絵画として伝播したことが推考される。本研究では、タイの古典絵画についての報告を行う。また、タイ画の描き方を調査し、同じ表現方法で古典絵画の再現を試みる。

キーワード:形態構成／タイ画

1. はじめに

タイではアユタヤ王朝(14世紀)以降、独自のタイ画が発展してきたが、日本ではあまり馴染みがないように思われる。タイは仏教国であり、タイ壁画の大半は寺院で見受けられる。それは、タイの宗教を柱に、仏教絵画として深く結びついたことが推考できる。そしてタイ画を普及させ継承するために、図形による基本的パターンを確立することが、布教にも繋がったのではないかとと思われる。実際日本においては、粉本^[1]が多く残っている。

現地で壁画の調査を通して、タイの古典絵画には王朝(時代)によるスタイルと決まったパターンがあることが判明してきた。パターンの基本形態は、時代や地域、風土や作家等によって少しずつ変化し、表現方法も多少異なっていた。また、パタナシン大学、タイ画の先生の協力を得、古典絵画の再現も試みた。

本研究では、古典絵画のスタイルであるパターンについて提示する。

2. 古典絵画の描き方

アユタヤ王朝(1350年～1767年)の描き方については、現段階では不明である。

2.1. トンブリー王朝(1767年～1782年)

基底材に木炭で下描きをして、墨で線描をする。乾いたら木炭の線を消し、赤色で線の外側を塗る。それから

細部を描きこむ。

2.2. バンコク王朝(1782年～現代)

まず基底材に下塗りをする。次に背景となる山や石、木々を描く。乾いたら下図を転写する。この時の下図は、紙に点穴を打った下図用型紙のことである(図1)。これを画面の上に乗せ、木炭粉か白土粉でこすると下図が転写される。そして彩色する。金箔を貼る場合は黄色を塗り、金箔を定着させる樹脂を塗って、金箔を置く。最後に赤茶色で細部を線描して仕上げる。

図1 点穴を打った下図用型紙

3. 図形におけるパターンの考察

古典絵画に共通する描き方のテクニックを文献から提示する。

3.1. 顔の比率と描き方

作家度による表現方法は異なっても、顔の傾きや角度、比率には共通したパターンがある。

1950年代、シラパコーン大学のルート プワンプラデイト教授は、タイ画を普及させ、古典技法を後世に伝えるために、タイ画のパターンに関する教本を残された。そこには、タイ画の鑑賞や学習、描き方とパターン、壁画の壁や下地の作り方、材料等について記載されている^[2]。

図2～4は、描き方のパターンの一例である。

3.2. 人の顔の比率と描き方

図5～9は、顔・頭部の描き方を、比率や角度、図式で表現された、わかりやすいものを提示した。図10, 11は人物を描く手順である。

図2 人物の顔、頭部の比率^[2]

図3 人物や猿の顔の傾きや角度^[2]

図4 人物や猿の顔の傾きや角度^[2]

図5 顔と頭部の比率^[3]

図6 顔、頭部の正面^[3]

図7 側面、頭部^[3]

図8 顔、頭部の斜面、側面^[3]

図9 顔、頭部の正面、斜面^[3]

図 10 神や天人^[4]

図 11 天女を描く手順^[4]

3.3. 猿の顔の比率と描き方

猿は円を基に描く. どのパーツを見ても, 円で構成されている.

図 12 猿の側面と頭部^[3]

図 13 猿の側面^[3]

図 14 猿の斜面^[3]

図 15 猿の頭部の構造と比率^[3]

โครงร่างหน้าลิง ด้านข้าง

๑. วิธีการแบ่งส่วนหน้า
๒. วิธีการเติมส่วนต่าง ๆ
๓. วิธีการเติมเส้นรายละเอียด (เส้นแฉ)

図 16 猿を描く手順(側面) [4]

โครงร่างหน้าลิง ด้านเฉียง

๑. วิธีการแบ่งส่วนหน้า
๒. วิธีการเติมส่วนต่าง ๆ
๓. วิธีการเติมเส้นรายละเอียด (เส้นแฉ)

図 17 猿を描く手順(斜面) [4]

3.4. 人物の手と足の描き方

人物に表情があるように、手足にも人物の動きや情景により、様々な表現があり、パターン化されていることが図 18, 19 から読み取れる。

図 18 手の表現 [3]

図 19 足の表現 [3]

3.5. 花のパターン

一つの花でも、角度により幾種類ものパターンがあり、花の種類や作家により表現方法も異なる。

図 20 花^[3]

3.6. 火焰の描き方

火焰は王朝(時代)により、スタイルが少しずつ異なるようである。

図5～21までは、タイ画の現代作家の例である。古典技法は師匠から弟子へと代々継承され、今日に至った経緯が推測できる。時代の変遷とともにスタイルも変化していることも見受けられるが、基本的パターンは、何れも共通している。

図 21 火焰のパターン^[3]

4. タイ画の制作

2章の古典絵画の描き方と同じ方法で、3章の図形のパターンを基に再現を試みた。2.2節の バンコク王朝の描き方の通り再現するため、空間の色を下塗りし、背景の山や石、木々から工程順に制作した。

図 22 は、タイ壁画の部分模写である。

図 23 は、タイ画の天女で、基本となるパターンの組み合わせで構成されている。

実際に制作してみることで、パターンや特徴を再認識することができた。

図 22 壁画の部分模写

図 23 天女

5. まとめ

本研究では、タイ画の古典絵画の顔や人体、火焰や植物の表現には、決まったスタイルやパターンがあることがわかった。そしてそのスタイルや、パターン、技法を継承していくために、タイ画の描き方についての本が出版されている。また、現地の文房具店にはタイ画の塗り絵があった。子どもからタイ画に自然に親しめるよう、タイの文化として定着しているようである。それらのことから、タイの宗教とタイ画が密接に関わり、今日まで継承されてきたことが考察できる。

いくつかの寺院の壁画を調査してみたが、湿度や天候で破損しているものが多く、あちこちで修復が見受けられた。今後、後世に作品を残す保存の必要性和、表現する上での決まったパターンやスタイルを継承する重要性を実感した。それは日本においても同様である。

本研究ではタイ画の部分的パターンについて提示し、タイ画の再現を試みたことで、三次元を二次元の線である図で表現することの重要性を感じた。図形は人間が考え出したものであるが、比率や角度、図式等の基本的パターンを決めることで、図形と宗教の伝承性が強まることから、図形がもつ意義と伝播の意味を思考することができた。本研究での模写は、縮小した大きさに再現したが、実物大では、より正確なパターンのテクニックがタイ画の善し悪しを左右すると推測できる。時代や風土、民族や地域、文化の相違なども踏まえて調査を続け、図形のもつ意義や大切さを認知し受け継ぎたい。

本研究は科研費(19401001)の助成を受けたものである。

参考文献

- [1] 東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室(編)，“図解 日本画用語事典”(2007)，
p113
- [2] Puang-Pradet Lert, “Silapa Thai : Tamra Pab Thai”, Watsilapa (2002), pp3-11 (Thailand)
- [3] Akarawong Sompon, “Thai Art : Jitrakam Thai”, Phochang Arts School, (2007),
pp13, 30, 31, 39-41, 44, 45, 49, 51, 54-57
(Thailand)

- [4] Rattana Sanan, “Silapa Thai: Pab Jitrakam Thai”, Watsilapa, (2002), pp10, 12, 19, 20
(Thailand)

著者紹介

みやはら わか : 平成3年金沢美術工芸大学美術学科絵画(日本画)専攻卒。平成3年富山県、公立中学校教諭。平成6年富山県、県立高等学校教諭。平成19年富山大学大学院教育学研究科(修士課程)教科教育専攻美術教育専修在学。

930-8555, 富山県富山市五福 3190

どうや ありさ : 昭62年愛知県立芸術大学大学院美術研究科修了, 昭和62年上越教育大学学校教育学部初等教育教員養成課程助手, 平成19年上越教育大学准教授、修士(芸術学)日本画, 日本美術院院友, 大学美術教育学会, 美術科教育学会。

943-0835 上越市本城町 1-25-303

つじあい ひでかず : 富山大学芸術文化学部准教授。博士(工学)。CGおよび画像処理などの研究に従事。日本図学会, 芸術科学会, 日本デザイン学会, 情報処理学会, システム制御情報学会, IEEE, ICGG等の各会員。

933-8588, 富山県高岡市二上町 180

にわ ようすけ : 1943年, 香川県高松市生まれ。東京藝術大学大学院(油絵専攻)を修了後, 同壁画研究室副手を経て, 全国各地の公共建築などに壁画を多数制作。富山大学教育学部美術科勤務後は, 自分の制作と並行し児童・生徒の壁画の共同制作に取り組む。これまでの壁画で最大のものは秋田県の体育館の200㎡, 本場イタリアでも壁画を制作。現在は富山大学芸術文化学部教授。

933-8588, 富山県高岡市二上町 180